

頭集 巻特 戦後史の「空白」だった中国の脅威

1975年の中国外相秘密演説

世界を震撼させた対外戦略の本質

編訳・解説 国際教養大学学長・なかじま・みねお

中嶋嶺雄

以下は一九七五年五月二十日、喬冠華中国外交部長が、天津警備区司令部政治部講堂で行った当面の世界情勢と中国の対外政策についての講演の抜粋である。

……私は中央を代表するのではなく、ただ私自身の立場から、今日は皆さんに国際情勢にたいする個人的見解を述べるものであり、正確かどうかはわからないが、諸君の書記がどうしても話せといつてきかないので、気の向くままに少し話してみよう。

1 フランスを訪問して彼らを元気づけてやった

……いるが、フランスのジスカールデスタン大統領もこの見方に同意して、「社会帝国主義」だとみなしている。われわれは勝手にそういつているのではなく、事実に基づいていつているのだ。

今回、私は鄧小平副総理に随行してフランスへ行き、友好的な接待を受けた。皆さんも新聞でフランスの大統領の話を読まれたことと思う。中仏両国指導者の会談は、重大な意義をもつもので、第三世界の関心がきわめて高いばかりか、アメリカやソ連も非常に重視している。タス通信が、いつものようにわれわれをののしつたが、ののしつたところで戦うことはできないし、ののしりは弱さと外面だけの強がりとを示すものでしかない。われわれは、ソ修がまだどんな巧妙な手口を使うか見ていようではないか。なぜわれわれは、この時期を選んでフランスへ行つたのか？ それは時間的にも、ブノンペン、サイゴンが相次いで解放されたというちょうどよい時期だったからである。

ではこの辺で天下を三つに分けるという言葉について語ろう。皆さんもご承知のように、第一世界とは米ソの二大覇権国とその従属国を指し、第二世界に属するのはイギリス、フランス、ドイツ、日本などの国である。第一世界と第二世界とのあいだの真空地帯にあるのが、新興の発展途上国から成る第三世界である。

毛主席は、「いまは一つの世界に二つの家があつて、天下を三分している」といわれたが、この言葉は皆さんも周知のところである。階級的にいえばただ二つの家があるだけで、それはつまり搾取階級とプロレタリア階級であつて、第三の家はない。修正主義もブルジョア階級の変種であり、しかもそれ以上に危険で、破壊的、欺瞞的、侵略的なものである。もしもブレジネフがみずから搾取階級であることを認めるなら、大変都合だが、彼は認めないし、やはりプロレタリア階級だといつて、マルクス・レーニン主義の旗印をかかげ、デマをとばして歩き、弱小国を侵略しようとし、「国際的独裁」をやろうとしている。われわれは彼を「新しいツァー」と呼ぶ

中国の兩漢末期、三国鼎立の局面があらわれたことがあるが、諸君はみな三国志演義を読んだでしょう！ あれはこの時代の歴史の故事を物語つたものである。

三国志演義を読むからには、当然、目的がなければいけない。当時、東呉に周瑜という人物がいた。皆さんも以前に京劇で「三たび周瑜を怒らす」の一齣を見たでしょう。あれは諸葛亮の計智が人並みでないことを物語つたもので、本来、もしも蜀の劉備と東呉の孫権が孔明や魯肅のいうことを聞き入れ、手を携えて共同で曹操に当たっていたら、曹操は絶対に南侵できなかったはずである。「天下を三つに分けて最後には晋に帰す」となったことには二つの原因があつた。一つは、東呉と蜀が兵火を交え、その結果、漁夫の利を与えてしまったため、このことがなければ東呉と蜀は滅亡しなかったであろう。第二は、曹操がいかに狡猾だったとはいえ、次の代になつて司馬昭に国を乗つとられようとは夢にも思わなかったことで、これを「虎を養つて患となる」という。毛主席はいま世界の百余カ国を天下三分の形勢になぞらえているが、そのことの意義の深さはこれではつきりとするであらう。

「米帝」が衰退敗北して氣勢が大いに損なわれたことと、「社帝」が不遜にも怪気焰をあげていることが、最

近の国際情勢の一つの特徴である。ソ連はアメリカ帝国主義が汚れたその手を引っこめてミシシッピー河で洗いきめているあいだに、自分が代って覇主の地位につくことを希望し、アメリカがフランスに学んでドゴールの道を歩むようにと考えているが、これは善いことかどうか？ われわれはいつもいつていることだが、ソ修は米帝よりも侵略的で欺騙的であるから、もしもアメリカがドゴールの道を行くなら、これはまさにソ修の思う壺である。これでは三つに分かれた天下のうちソ修がその二つを獲得することになるので、フランスと西欧はあわてざるを得ない。われわれはどうか？ われわれとしても、ソ連がしゃしゃり出て、圧迫され奴隷化されてきた人民が虎を追い出したところへ狼が来たというようなことにならないよう願っている。これは大変矛盾しているように、実際には矛盾ではなく、時間の問題にすぎないのだ。情勢を論ずるのにもっとも重要なのは時間の観念からズレないことであり、二十数年まえにもしも私がこのようなことをいったら、諸君はきつと私を砲撃し、油揚げにして、私の外交部長というこの地位を打倒するであろう。陳毅同志を毛主席がどのように称讃したのは、彼が十数年前にこの点を見抜いていて、「西方を安定させ、横に連携してソ連に対抗しなければ、背後に敵をもつことになり、ヒマラヤに登らなければならなくなる」

といっていたからにはほかならない。
ブルジョア階級とすべての搾取階級は遅かれ早かれ滅亡し、三つに分かれた天下はいつかきつと共産主義の紅色天下になる。これは必然の趨勢であって、これを阻むことはできないが、しかし全地球の一片紅（赤一色——訳者）は、われわれがなにもせずに口先で語っていれば自然にそうなるのでは決してないから、われわれプロレタリア階級の政党とその指導のもとにある国家と人民は、遠大な理想、明確な方向および実事求是の精神をもつだけではなく、さらに正しい政策と戦略戦術をもたなければならぬ。

ここでは国内問題にはふれずに、全世界に眼を向け、どの方向から力を入れるべきかをはっきりさせよう！
いうまでもなく、まず団結できるすべての勢力と団結して、第一に共同の敵——つまり米ソ二大覇権に対処しなければならぬが、二大覇権も区別して当らなければならぬ。区別せずに、無理に圧力を加えると、二大覇権を一つに固まらせてしまうことになり、手におえなくなる。だから主要と副次とを分けねばならず、これを各個撃破という。

フランスはイギリス以上に（ソ修を）恐れているけれ

ども、イギリスはまだ一つの海峡によって隔てられているが、フランスには守るべき拠点がないからである。もしもソ修が進攻を開始すれば、第二のドゴールがアフリカへ行って亡命政府をつくるという機会はもうあり得ないだろう。彼らはこのことを恐れており、われわれも喜んでそれを見てはいられないので、この時期を選んでフランスへ行つたのである。これは一つには招待されたためであるが、もう一つには彼らを元気づけてやるためだった。同時に、アメリカに考える余地を与えたいためであり、アメリカ人には（ヨーロッパから）出て行くのなら出て行けばよいが、出て行かなくてよいのなら留まるように勧告した。アメリカの足を引っぱったことは、

ソ連に打撃を与えたことであり、かなりの痛手になったことはたしかで、これは一挙兩得どころか一挙三得である。機は失うべきでなく、時に再来はない。総理が病気でなかったら、総理がこの



喬冠華

たびみずから出かけたにちがいない。早くもなく遅くもなく、この時期に行つたことは、主としてまさにこの一点にあったのである。

だが、このことは、フランスの指導者とわれわれとが同一家族になったことでは決してなく、われわれは彼らの反ソ反米を支持するだけであって、フランスの現行制度に賛成しているのでは決してない。それどころか、この制度は将来、やはり転覆しなければならない。

2 華僑と革命について

今日出席している諸君のなかには外事関係の仕事をしている幹部が多い。外事工作はすべて華僑の出国問題と関連している。従って、フランスとインドシナ情勢に言及したのちには、この問題をここでとりあげる必要がある。毛主席は、華僑の出入国問題は「来る者は歓迎し、去る者は歓送する」ようにすべきだと提起された。総理がきめた八項の指示は皆さんも知っており、実施されている。今後やはり、政策は不変だといえるが、ただその定員については適當な考慮を要するだろう。

大多数の華僑とその一族は、出国後の様子もおしなべて良く、さらに祖国を熱愛し、毛沢東思想を積極的に宣伝している者も少なくない。このようにうまくゆけば、

将来、東南アジア各国がすべて解放されたとき、その内部に出国が緩和された政策の時期に出て行った者が多くいることになるではないか？ 革命は、中国でおこなわれてはじめて革命で外国でのそれは革命ではない、とはいえない。また、現在革命的ではなく、もしくは思想的に落後しているからといって、生涯、革命的でなく、落後しているともいいきれない。革命には地域の別がなく、先進後進の別もない。

華僑の絶対多数は第三世界から来ており、彼らは長期にわたって異郷で生活し、その地の人民と一体になっている。居住国の民族独立運動と民主革命運動にたいして、その地の民族経済の繁栄にたいして貢献している。彼らの子女や本人の祖国への帰還をわれわれは歓迎するばかりか、金を出して身の振り方を接配してやらなければならない。

華僑は国外で程度の差こそあれ、帝国主義と反動派から政治や経済の面で圧迫を受けており、必然的に革命的な意識をもつようになっていく。彼らが愛国的情熱をいだいて帰国し、社会主義の教育を受け、毛沢東思想の真理を吸収し、いままた元の居住地に帰ろうと申請しているのは、まさに「もと来たところに帰る」であって、これはきわめて正常なことである。彼らのなかの若干の者は、毛沢東思想を立派に利用して社会を分析し、自分の

学習に努力し、ひきつづき毛沢東思想を宣伝できるようにしさえすればよい。異なった環境のなかで、怠らずに生存し、闘争しつづけ、力をたくわえられれば大変よい。こうした一生にそむくことないよう党は彼らにたいする教育に注意すべきである。この問題はここで一応打ち切り、あとで革命は輸出できないかを話すときにもう一度補足しよう。

3 中東問題は米ソの覇権争いにある

中東の風雲が屈曲をきわめているのは、米ソの覇権争いの必然的結果である。「戦わず和解せず」というのが、互いに争奪しあい、牽制しあい、利用しあつて戦争とニセの和平をもてあそぶ米ソ両覇権国の手段である。

こうして中東人民は無残な戦禍にまきこまれ、とめどもない災難に出会っている。今日われわれが反対するのもまさにこの点であり、すなわち、米ソの勢力が中東を争奪し、中東を生贄にし、実験品にし、埋葬品にすることに反対しているのである。こんな局面は終結すべきであり、中東人民は自ら決すべきである。だが、これは願望であって、やはり中東人民自身の力で自決を実現するよう努力すべきである。

イスラエルは元来、すでに一千年前に亡んでいたもの

進むべき道を選ぶであろう。結局のところ、革命で社会を改造するか、それとも革命しないで空しく一生を送るか、または、革命に背を向けて生き、最後には時代に棄て去られるか？ 大多数の出国華僑とその一族は、革命に共鳴し、それを支持し、少数の者は革命に身を投じて、その地の人民革命と相結合するか、もしくは革命の指導者になるものと信じている。従って、華僑はマルクス・レーニン主義の教育を受けたのち、自覚し、共鳴し、支持もしくは参加し、一部は革命を指導するようになり得るのである。

こうした可能性を否定することは、実際には、マルクス・レーニン主義が、四海に遍く偉大な真理であることに疑問をもつことになる。この点をはっきりさせたうえで、中央の出入国制限緩和の政策と指示を再び実行すれば、心に自信をもつてこれをおしすすめることができる。ただ、当面、多くの国の革命の条件がまだ未成熟であり、同時に大多数がわれわれと外交関係をもっているので、この問題の処理については、在外華僑の問題も含めて、慎重を要する。従って、われわれは、出国した華僑とその一族を必ず教育し、元の居住地でその地の政府と法律を尊重し、現地の人民大衆と一緒にいるようにさせなければならない。彼らが大衆と一緒にいる、ひきつづき祖国を熱愛しひきつづきマルクス・レーニン主義の

が、いま再び出現してきたものである。すでにイスラエル共和国という国家が成立してしまっている以上、そんな国は存在しないといってみたくて通用しない。どのみちパレスチナ難民の身の振り先を考えて故郷に戻すことはできないし、そんなことをすれば今度はユダヤの難民群が出現する。しかしこの問題の解決は比較的手がかかる。王海容副部長（毛主席の姪ともいわれる通訳兼秘書で、外交部副部長に昇任した——訳者）がかつて毛主席にイスラエルをわれわれが承認すべきかどうか、とたずねたとき、毛主席は、「曹仁が東呉と奮戦しているとき、孔明は巧みに荊襄を手に入れた。鋭気を養いつつ敵の疲れを待つのであり、泰山に登って虎のたたかいを観戦するのがよい」と語った。イスラエル！これについて私の個人的見解は、イスラエルはないよりもあった方がよく、そのままにしておいて承認しない、というものである。まずそのままにしておいて、見守り、時間がたつてからまた問題にする。どのみちソ修は米帝とたたかうことになり、アラブの大小様々の王様も、金の遣い道、遣い所に困ることはなくなるだろう。彼らは国を愛さずに自分の王朝を愛し、人民を愛さずにただ個人の享楽を愛している。ラクダや鷹に遊びあき、砂漠に住むのがいやになり、銃や大砲を買いだがつており、富と武勇をたたかわせようと血迷っている。だから彼らにソ連の

飛行機を買わせてアメリカの飛行機を攻撃させ、アメリカのロケットを買わせてソ連の戦車を攻撃させればよく、ひとしきり大騒ぎをすれば冷静になるだろう。

というのは、最後までたたかっただけで誰に勝つかといった問題ではなく、またユダヤ人が滅亡するとかパレスチナ人民が地球から消滅するとかいったことでもなく、革命の嵐が米帝とソ修の侵略勢力を駆逐することにほかならず、人民の膏血をすすり、淫乱をほしのままにし、人民をあざむき圧している封建支配階級と人民の頭上を踏みつけている大小の王朝を徹底的にくつがえすことにほかならないからである。ファイサルであろうが、カダフィであろうが、サダトであろうが……あるいは彼らのどんな後継者であろうが、みなすべて同様に歴史の判決から逃れることはできない。この日が来たって、人民の、光明ある中東になるのである。中東人民は十分に自決できると信じている。彼らの革命目標さえあれば、アラブ人がユダヤ人と平和的に共存できないなどと心配する必要はない。難民というこの名詞は、もともと帝国主義が人びとの頭上に押しつけたものであり、われわれはこの名詞についてとやかくいい争う必要はない。私は、ただ同志諸君が「全世界のプロレタリアートは団結せよ」というマルクスの名言を忘れないよう希望する。毛主席が五年前に提起した反帝・反修の国際統一戦線に

朝鮮本島に新たに戦争が爆発する可能性があるかどうか？ 手許のメモによって説明しよう！ 朝鮮は二十年前にソ連のスターリンと中国志願軍の援助のもとで、外部からの侵略を撃退した。三十九万のアメリカの大軍を副葬品としてこの戦争は終結した。当時の朝鮮戦争の銃声は、ちょうどインドシナの抗仏闘争と時を同じくして響きわたったのである。いままた、インドシナ戦争が終わると、金日成が北京へ来たが、世の中には偶然に一致することが多い。私はフランスでいくつかの外国の新聞を見たが、みなこの問題を論じており、何十もの眼が中国に注がれていて、朝鮮がたたかうかどうか朝鮮人民にあるのではなく中国にあるかのである。中国としてはとんでもないことで、朝鮮のことは朝鮮人民のみずからの主張をもっている。

古き時代の軍事家は、戦争をするときに「天の時、地の利、人の和」をすこぶる強調した。この三点のうち、われわれは二つの点を取りあげよう。

一つは天の時、これは時機とでもいうべきだが、朝鮮人民共和国は一日も早く祖国を統一しようと希望している。どんな方式を用いるかは、朝鮮人民の内政問題であって、われわれを含めて誰も干渉できない。朝鮮が帝国主義の侵略を受け、戦火が鴨緑江のほとりまで及び、

かんする呼びかけ（一九七〇年五月二十日の毛沢東声明）「全世界の人民は団結してアメリカ侵略者とそのあらゆる手先を打ちまかせよう！」——訳者）に込めるよう希望する。現在われわれは資本主義国とも交際し、商売をし、またアラブ人民の正義の闘争を支持しなければならぬが、しかし、われわれは終始、世界革命の理想と任務を放棄することはできず、しかも最後の勝利は必ずアラブ人民のものであって帝国主義と反動派ではないことを深く信じている。

4 朝鮮戦争はやはり準備がいる

金日成の名を口に出すと、会場の同志諸君はなにやら顔を寄せ合って耳打ちしているが、皆さんは彼のことを「根っからの修正主義者」とでもいいのだろうか。それは金日成が北京に来たとき、歓迎の隊列のなかの一部の人びとが訝えない表情だったことからよくわかる。私はこの見方を糾（ただ）そうと思うし、皆さんも「根っからの修正主義者」などとはいえない。総理も朝鮮に学ばねばならないといわれたが、彼らが根っからの修正主義者なら、どうやって学べようか？ 朝鮮の同志には彼らの苦しい立場があり、そこを分析して付きあつてゆかなければならない。

「唇なくなりて齒寒し」ということになるのでなければ、われわれは先に手をくだし、兵を出して戦争に加わることはしない。もしも彼らの内政問題であるのなら、われわれはただ道義的な支持と物質的な援助ができるだけであり、同時にその時の情勢と朝鮮の同志の態度を見なければならぬ。「反帝はやるが反修はやらない」では、おそらく通用しないだろう。

朝鮮は初めわれわれと親密だったが、その後われわれから離れてソ連に近づき、また修正主義を国内に氾濫させた。やがてソ連に一杯食わされ、また小日本（舊）外交部長は日本を「小日本」と見下している——訳者）の軍国主義復活がこわくなり、早速、崔庸健を派遣してきた。（崔庸健・最高人民会議常任委員長とす北朝鮮党・政府代表団は一九六九年九月に中国を訪問した——訳者）国内でまた（中国人民）志願軍の記念碑や記念会館をつくったりした。いままた金日成がやってきたので、われわれは盛大に歓迎し、毛主席も会見されて、意見を交換した。彼はソ連にも行くそうで、この点はすでにわれわれにことわっている。ソ連に行ってもどうってことはなく、行ったからといってなんでもない。われわれがフランスへ行ってもなんでもないのと同様であり、自分が修正主義をやらず、マルクス・レーニン主義

を堅持するかぎり、第三者が影響を与えようと思っても影響されるものではない。

金日成はどうであらうか？ その態度は現在なお矛盾しており、ソ修をおそれて、その機嫌をそこねることをしない反面、中朝両国人民の伝統的な友誼をも保持したいと思っている。これと同時に、突然軍を進めても、米帝と南朝鮮の朴正熙傀儡集団を打ち敗かすことはできないのではないかとおそれる反面、小日本の軍国主義を復活させるのではないかと心配している。このような境遇と苦悩をわれわれは理解してやらねばならず、要するに朝鮮はやはり社会主義国であり、金日成は、まだ修正主義ではないのだ。

第二に地の利についていえば、朝鮮はインドシナとはちがう。この席にいる多くの同志は二十年前に朝鮮戦争に参加したことがあり、朝鮮の地形には精通していて、暗闇でも手探りで歩けるほどだ。これらの同志は、朝鮮での戦争は、インドシナのそれとはちがいが、比較的大きな旋回の余地をもち、機動戦に便利であることを知っている。朝鮮の戦争は、作戦する双方の闘士によって決定されるのみならず、強大な火炮、大量の戦車、飛行機によって決定されるのであり、皆さんは映画で見てご存知

支持するのか？ ラジオ放送で一言一言支持の言葉を述べ、新聞紙上に数行の讃美の言葉を書けばよいのかどうか？ もちろんダメである。精神のおよび道義的な支持はもちろんのこと、さらに物質的な援助を必要とする。カンボジアを例にとると、シアヌークやキュー・サムファンに「われわれはあなた方を支持するが、お金もなく、武器もない。あなた方は素手でアメリカの武器にぶつかってくれ」といえるだろうか。もちろんいえない。皆さんは、毛主席が抗日戦争の時期にいわれた「われわれは自力更生を主張するが、外からの援助を拒むものではない」という言葉を思い起こさなければならぬ。カンボジアにたいしても同様で、自力更生がもつとも重要で、彼ら自身が決心をくだし、大衆を発動して統一戦線をつくるなら、われわれは彼らに物質的援助を与えるが、自力更生をせず、カンボジアの大衆を発動しないとすれば、われわれが武器や物資を与えても、誰に使われるのか？ アメリカの失敗は、まさにこの一点にあったのであり、アメリカが育てた傀儡はすべて外からの援助が主で、自力更生は二の次だとして放り出してしまい、十個の傀儡政権が十個とも運輸大隊長になってしまふ。

他の国もカンボジアと同様で、彼らの人民が革命に立ちあがりさえすれば、われわれはきつと支持し、きつと

のように、立派な山が、みな何メートルも削り取られている。これは準備の過程が必要だということであり、この点はわれわれがすでに朝鮮の同志にはつきり話してある。

朝鮮問題にたいして、皆さんが大変敏感なのは不思議ではない。戦争は、遅かれ早かれやらなければならぬ。平和統一の可能性はあるが、大きな希望はもてない。戦争をいつやるかは、朝鮮の同志がこの情勢をいかに見ているかを見定め、さらに朴正熙がどんな様子かを見なければならぬ。今年の国連総会でわれわれは朝鮮問題を提出して、世界の反応がどんなものであるかをもう一度見て、それから朝鮮の同志にわれわれのその後の見方を提出することになろう。現在は、暫くこのままでゆく。つまり、チャンスはまだ来ないからだといえるが、チャンスは一たび来たらその機を失うべきではなく、時に再来はないのである。

5 革命は輸出しないことの意義

民族民主革命を支持すること、これは責任転嫁のできない国際主義的義務であり、過去においても、現在においても、また将来においても変わりはない。どうやって

大量の支援をおこなう。その国の人民が立ちあがらず、革命の時機が未成熟であれば、われわれは人を派遣して転覆をはかったり、派兵して干渉したり、軍艦を動かして他国の領土を侵略することは決してしない。だからわれわれがマレーシアの首相におこなった保証も、この一点においてであり、もう少しすればフィリピンの大統領もやってくるが、また同様にこのような保証をおこなうし、その次に来る者にたいしてもまた同様である。われわれに保証させておいてから、現地人民の革命闘争を阻止し、共産党が指導する革命運動を阻止するように乗り出させようといつても、そんなことはできない。もしもそんなことをしたら他国の内政に干渉するばかりか、兄弟党の内政に手荒く干渉することになる。

はつきりいえることは、マラヤ共産党にせよ、他の共産党にせよ、彼らの革命闘争については、彼らが勝利するまで、これまでどおり支持するということである。この原則は絶対に不動であり、むしろ玉碎するともいたずらに身を全うせず、であつて、はつきりいつてしまえば、こうなのである。われわれが派兵して他国を侵略することはなく、ソ修のように人を送って兄弟党の頭上から指揮棒をふるうことのないかぎり、革命「輸出」の問題は存在せず、どういおうがいわれようがかまわない。

もしもわれわれが本当に侵略しようと思ひ、本当に革命を輸出しようと思つて、他国の共産党の肩替りをすれば、東南アジア諸国など半年か一年で全部かたづいてしまふ。

6 各国人民、兄弟党の革命闘争を支持する

東南アジア諸国で汚職腐敗分子でない指導者を探し出すことはまったく難しい。これらの人物はどうあろうと、少しでも民族意識をもっていればいい方である。それ以上要求してもダメで、この点については、最近、われわれはフィリピン、タイなどと国交を結ぼうとしているが、皆さん、あらかじめはっきりさせておかないといけない。

東南アジア諸国の大部分は、反共国家であるが、アメリカの反共とは異なっている。後者は共産党の合法的な存在を許しているが、前者は共産党の存在を許さず、共産党は地下闘争の状態におかれている。これらの国家はアメリカと利害関係をもち、台湾とも程度の差こそあれつながっている。

もしも明日、ソ修がやってきて十億、二十億支援すれば、

ば、彼らはたちまち百八十度大転換して、反中国・反米となり、モスクワの胸に飛びこんでゆく。だから彼らの反共は大層頑固だが、反共のあと、どうしたらよいのかわからない。その反共目的の追求が、真に民族と国家の利益になるのかどうか、スハルトは答えず、マルコスも答えられないと思う。たとえばフィリピン大統領夫人はフィリピンの美人コンテストで選ばれた美人であり、美人コンテスト自体が資本主義の腐敗した制度の産物なのである。大ブルジョアジー、大地主階級は女性をもてあそび、婦女を男子と不平等な地位に置き、花瓶のように見たてて支配階級が観賞するのであるが、マルコス大統領夫人はその典型的な例である。この点からして、皆さんはフィリピン大統領とその夫人が代表するのはどんな階級の利益であるのかはつきりすることができる。「どんな樹にどんな花が咲くか、どんな階級がどんな話をするか」、これはどうにもならないことである。

だが、目前の国際情勢からして、われわれは彼らと話しあわなければならず、ニクソンのように、彼を招いて話しあわなければならない。われわれは、毛主席の英明さもまさにこの点にあるということができ、事と人ともにたいして緩急軽重、みなかけひきがあるのであり、これから徐々に皆さんにもわかつてもらえるであろう。

〈解説〉

現在も変わらぬ覇権主義 喬冠華演説の衝撃

中嶋嶺雄

中国外交の

「ホープ」だった喬冠華

私が訳した喬冠華外交部長（外相）の秘密演説の記録は、「正論」1976年1月号に「第三世界、共産革命の宣言」のタイトルで掲載された。今回、編集部からの本別冊への再掲要請に応じたのは、35年以上も前の歴史的文書でありながら、その重要性が今もまったく失われていないと考えるからにほかならない。

当時演説記録に付した解説文も新たに、改めて紹介する。

喬冠華が姬鵬飛・前部長更迭のあとを受けて中国外交の最高責任者になったとき、周恩来、陳毅以来の本格的な外相の登場だと感じたのは私のみではなかっただろう。1950年代初頭、中国外交が華々しくクロップアップされたとき、台湾問題討議の国連安保理事会（1950年）、朝鮮戦争停戦のためのジュネーブ会議（1954年）、アジア・アフリカ非同盟諸国の首脳が「平和五原

則」「平和十原則」を求めて一堂に会したバンドン会議（1955年）などに出席してきたそのキャリアからしても、1969年の中ソ国境交渉の中国側代表団長であり、1971年の中国の国連加盟後の初代代表団長であったという輝かしい経歴からも、さらには1974年の鄧小平の国連特別総会演説「三つの世界論」（演説記録参照。中国は「第三世界」の盟主とした）の起草者といわれていることからしても、国連ではしばしば拒否権を行使してきた「ミスター・ニエット」ことグロム・イコ・ソ連外相と互格だったといつてよい。従来彼は、周恩來の陰にあったため目立たなかっただけである。

その喬冠華が1975年5月20日、天津市できわめて重要な外交演説をおこなった。演説のなかで喬冠華自身が語っているとところによる、この演説は、天津直轄市、河北

省、区の各級党委員会委員以上の幹部と部隊と連隊長以上、河北省地方委員以上に対しておこなわれたものである。こうした幹部への演説であるだけに、中国外交の本音とその世界革命戦略がそのまま表出している。

しかも、この演説は「情勢に従って変わる。われわれの外交政策も変わったし、その変わり方も大変はやかかったので、外交部もいささか面食らって足が乱れ、準備に手こずったが、現在はいまうまうっている」と喬冠華自身が告白しているように、1971年のニクソン・キッシンジャー訪中による米中接近以来の中国外交の変化にたいして、「国家外交」と「革命外交」との関連はどうか、中国外交の変化がその世界革命戦略と矛盾しないか、といった刺激的な質問に答えるための講演でもあった。華僑と「革命輸出」の問題、東南アジア諸国との国交樹立と現地共

産党への支援の問題などに多くの部分がさかれているのは、そのためである。

「革命の輸出」にからむ

喬冠華演説は、対米接近など中国外交の変化に慣れてしまつて、その本質を忘れかけていた人びとには冷水を浴びせられるようなものであり、全編衝撃的な内容に充ちてゐる。紙数の関係で割愛せざるを得なかったが、中国が日本の潜在的力量にやはり脅威を感じていること、深刻な中ソ対立に直面していた中国は、西ヨーロッパ、とくに西ドイツや朝鮮半島からの米軍撤退を本心では望んでいなかったことなども興味深い。インドシナ戦争では1970年代初頭には、完全に行き詰まっていたのに、アメリカがカンボジアのロン・ノル政権をかつぎだしてくれたお陰で、助かった。ことなども語

られている。

それにしても、鄧小平副総理の訪仏の狙いを語ったのち、フランスとは当面、反米反ソつまり米ソ二大覇権への反対で一致するから連合するが、フランスの現行制度は打倒されるべきだといったり、中東戦争についてもアラブの石油闘争を支持する中国が、当面は米ソを角逐させておき、最後にはカダフィをも含むアラブの支配者がやがて革命人民に打倒されると見なしていることなど、その言辭は厳しい。

金日成訪中（1975年4月）をめぐる謎もこの演説を読むと大分解けてくるし、朝鮮戦争はいつか必ず起こるとして、しかも金日成を「反帝はやつても反修（反修正主義）反ソ連」はやらない」としたらダメだと全面的には信用していなかった状況を知ることでもある。当時、マレーシア、フィリピン、タイと相次いで国交を結んだにもかかわらず、こ

れら諸国のリーダーをまったく信用していないこと、毛主席と会ったマルコス大統領夫人への痛烈な評価、中国が本場に「革命の輸出」をしようにとすれば、東南アジアなど半年か一年でかたづくといっていることなど、いずれも衝撃的な発言である。

問題は、中国の指導者が本場にこのような認識に立脚しているのか、幹部や大衆を指導する立場から、あえてこのような主張をおこなっているのか、という点にかかっているが、少なくとも毛沢東時代には東南アジアへの「革命の輸出」は、当然のことのように行われていた。たとえば、1974年5月に中国はマレ

ーシアと国交を樹立し、その前後には東マレーシア（ボルネオ島）の中国系サラワク・ゲリラの大量投降（帰順）があった。しかし「毛沢東思想」による武装闘争の継続を叫ぶ北カリマンタン共産党中央委員会議長長声明「武力による国家権力奪取の道を歩みつづける」が『北京週報』（1974年第10号）に掲載され、当時の中国当局はこれを支持していた。

マレーシアとタイの国境一帯は、かつては「幻の共産党」と言われ、反英独立闘争で知られたマラヤ共産党の陳平書記長が指導するゲリラ活動の舞台であり、私自身が海外学術

調査でマレーシア・タイ国境地帯を訪れた1975年秋には、この一帯に戒厳令がしかれていた。タイ共産党の機関放送「タイ人民の声」が中国の「革命の輸出」政策のPRを受け持っていたことも歴史の事実である。

さらにはインドネシアの共産党（PKI）が1965年のインドネシア九・三〇事件の敗北した主役であったこともよく知られている。フィリピンにも戦後一貫して共産党勢力が存在したが、1969年には「毛沢東思想」に依拠した新人民軍（NPA、New People's Army）が中国の「革命の輸出」戦略の一環と

絶賛発売中

全編歴史的仮名遣い
本文総ルビ
イラスト78点掲載

いのち燃ゆ 乃木大将の生涯

85判 1,500円(税込)

西洋のリンカーン、
東洋の乃木と称えられ
世界にその名を轟かせた
乃木希典大将の生涯

長州藩士として育ち、明治維新に邁進した青春期、青年将校から日清・日露戦争での活躍、学習院長としての教育者の顔…。一切の私欲を抱かず、武士道に生き、武士道に殉じた明治の英雄・乃木希典の生涯をつづります。

問合せ：乃木神社・中央乃木會
〒107-0052
東京都港区赤坂8-11-27
TEL.03-3478-3001
FAX.03-3478-3005
http://www.nogijinja.or.jp
E-mail:nogikai@nogijinja.or.jp

して誕生し、2012年の今日でも
ルソン島農村部で活動が続けてい
る。

「革命の輸出」戦略とともに、中国
の革命外交にとって重要な東南アジ
アや世界各国の華僑が、最終的には
中国共産党の「第五列」になるであ
ろうことを確信している姿勢にも注
意しなければならない。中国有事の
際には、国外在住の中国人も動員で
きるとした「国防動員法」が施行（2
010年7月）された現在、その意味
するところの重要性は増している。

米国も喬演説を重要視

喬冠華演説の信憑性についてコメ
ントをしておきたい。喬冠華演説の
要旨を私が知ったのは、はやくも1
975年7月のことであつた。その
後、9月上旬に香港へ立ち寄ったと
ころ、香港では、8月下旬から9月
上旬にかけて、この演説の真偽に話

題が集まっていた。台湾の『中央日
報』や香港の中立右派系紙『明報』
が喬冠華演説の抜粋を発表し、中国
系紙がそれに批判を加えたりしたか
らでもあり、その後も台湾側の文獻
資料に喬演説が掲載されたが、台湾
に関連した部分が削除されていたこ
ともあつて、結果的には各種の抜粋
やテキストが出たことになった。内
容についてもさることながら、この
ことが真偽への関心を高めたともい
えよう。

しかし、本誌が用いたフルテキス
トを語法や表現から見て詳しく検討
し、さらにアメリカ国務省も、この
喬冠華演説に注目して分析を加えて
いたこと、西独の『フランクフルタ
ー・アルゲマイネ』紙が北京特派員
の記事として喬演説を掲載したこと
などに注目すれば、喬演説の信憑性
は疑問をはさむ余地がないように思
われる。

その後のアジア情勢の変化やマラ

（平成22年12月号）でも述べたが、
私は、1990年代初頭の東西冷戦
体制の崩壊後も、アジアには冷戦構
造が残っていると指摘してきた。冷
戦とはイデオロギー対立のみならず
体制の対立であり、中国も北朝鮮も
共産主義独裁政権は現在も崩れては
いないからである。人権や民主主義
という問題はいうまでもないが、安
全保障や国際政治といった大きな枠
組みを考える際に、この点は特に明
確にしておかなければならない。従
って、中国のいう「改革・開放」で
さえも、それは共産党独裁体制下の
政策ないしは戦略・戦術でしかない
、という認識を持つことが必要な
のである。

では、今回改めて紹介した「喬冠
華演説」にみる共産党独裁体制の対
外姿勢の本質とは何か。他国の人民
の革命闘争を支援するのは「革命の
輸出」ではないと強弁しながら、そ
の革命闘争が阻止されたら内政に干

渉すると言い切る強固な覇権主義で
ある。

近年は、「革命の輸出」にはかつ
てのような熱心さはないにしても、
経済発展をテコに大増強を続けてき
た軍事力を背景に、領土・領海問題
でその覇権主義を露わにしている。
南シナ海は「核心的利益」と公言
し、尖閣問題では日本側に譲歩した
り理解を示したりする気配が一切な
い。特に、2010年の漁船衝突事
件で起きた反日デモで、中国固有の
領土観が再び顔を見せ始めたことに
注意したい。中国内陸部のデモ隊
は、「收回琉球、解放沖縄」という
スローガンを掲げていた。かつて中
国共産党は沖縄の反米基地闘争をし
ばしば支援していたが、この「琉球
を回収し、沖縄を解放する」という
主張は、実は中国共産党の領土観の
源流なのである。

毛沢東は1936年に中国で初め
て出版された晉察冀日報社編の『毛

や共産党への中国共産党の祝電問題
についての在マレーシア中国大使館
筋の発言（詳しくは拙稿「マレー半
島縦断記」『中央公論』1975年
12月号参照）などからして、中国側
も喬演説を当面の対外政策の基調に
していたように思われる。

毛沢東の領土観に基づく 覇権主義の台頭

中国外交に関してこれほどの深い
認識と経験を有していた喬冠華も1
976年秋の北京政変（「四人組」
逮捕）によって失脚し、中国外交の
第一線から退き、1983年9月に
満70歳で逝去している。

とはいえ、「改革・開放」政策に
転換した中国がいかにか国際協調を強
調しようとも、共産党の独裁体制が
続いているかぎり、「喬冠華外交」
は今も活きていると見做さなければ
ならないと考える。

外務省の外交専門誌『外交』Vol.4

沢東選集』一卷所収の論文「中国革
命と中国共産党」の中で、「戦争に
よって中国を打ち破った後、帝国主
義国家はたちまち中国の多くの属国
や一部の領土を強奪した。日本は朝
鮮、台湾、琉球、澎湖諸島と旅順
を、イギリスはビルマ、ブータン、
ネパールと香港を領有し、フランス
は安南（ベトナム）を領有した。さ
らにポルトガルのような狭い小さな
国もわれわれのマカオを領有した」
と述べていたのである（建国後の人
民出版社版『毛沢東選集』では削
除）。つまり、毛沢東は、初期に
は、朝鮮も沖縄も台湾や澎湖諸島と
ともに日本が奪った中国の属国ない
しは領土と見ていたのであり、それ
を「回収すべし」という国家的願望
が表に出始めているのである。

この際、喬冠華演説を熟読玩味し
て、中国の対外姿勢の侵略的な性格
とその戦術的な緻密さをもう一度考
えてみたいものである。

別冊 正論

PUISAWI
COMMUNICATIONS
GROUP
OPINION MAGAZINE

THE SEIRON
18

別冊 正論 18

なぜこの脅威を見てこなかったのか

日中国交40年 汚辱と背信の系譜

★驚愕の封印資料入手!

総理も手にした「反共報告書」が教える売国政治家たち

中西輝政／江崎道朗／長塩守旦

THE SEIRON Extra 18

発行日：2012年9月21日初版第一刷発行

発行人：榎山幸夫 編集人：上島嘉郎

発行所：産経新聞社

発売所：日本工業新聞社

電話：【編集】03-3275-8925

【販売】03-3243-8469

【広告】03-3243-8478



なぜこの脅威を見てこなかったのか

日中国交40年 汚辱と背信の系譜

introduction

中国の本質を知らぬ「友好」で国滅ぶ…金 美齡

巻頭特集 戦後史の「空白」だった中国の脅威

あらかじめ定められた「屈服」-対日工作年代記…中西 輝政

1975年の中国外相秘密演説……………中嶋 嶺雄

東アジア冷戦の真実 最大の標的は日本…江崎 道朗

狙われ続けてきた戦後の沖縄……………三荻 祥

《国交前史》埋もれた資料が明かす対日工作…野村 旗守

特集 かくも深き禍根

台湾-国交「正常化」の巨大な損失……………渡辺 利夫

微笑みの尖閣「棚上げ論」に騙された愚……………石 平

世界史に残る失態「天皇御訪中」決定…小堀 桂一郎

政治と表裏一体「経済交流」の罪状……………青木 直人

友好貿易の幻想-中国に翻弄された国貿促の足跡…波多野 勝

周恩来、鄧小平、江沢民…中共指導者列伝…宮崎 正弘

特集 日本人を屈服させたのは誰か

異形なり! 私が体験した「中国研究」という空間…宮脇 淳子

国交「正常化」を煽り立てた朝日の大罪

【人脈編】社内を闊歩した左翼・コミンテルン人士録…本郷 美則

【報道編】かくも凄まじき「走狗」ぶり……………片岡 正巳

NHK 媚中番組アーカイブズ……………中宮 崇

雑誌が奏でた国交「正常化」狂想曲……………三浦 小太郎

特集 覚醒か亡国か

人口侵略を自ら呼び込む「人道的平等バカ」の国…板東 忠信

記憶から消された「民族戦」の脅威……………西尾 幹二

「中国の核」を忘れるな……………神谷 万丈

尖閣を守る 日本を守る-対中抑止力を飛躍的に高める戦略…潮 匡人

THE SEIRON Archives

曾野綾子/関岡英之/岡田英弘



9784819150453



1929436009526

ISBN978-4-8191-5045-3

C9436 ¥952E

産経新聞社/日エムック
雑誌 67111-45

定価 1,000円(本体952円)